

「現実科学」の理念と困難

——ハンス・フライヤーの社会学について——

宮武実知子

一 序

「保守革命」と呼ばれる思想潮流がある。ワイマール共和国期ドイツで隆盛を極めたこの思想の擁護者たちは、非合理主義やドイツ・ロマン主義の伝統を継承しつつ、変革志向の強いナシヨナリズムのイデオロギーを主張した。⁽¹⁾ 哲学者としては、しばしばマルティン・ハイデガーの名が挙げられる。社会学で同様の位置にあるのが、ハンス・フライヤー (Hans Freyer 1887-1969) である。彼は、いわば「いかがわしい」⁽²⁾ 社会学者なのである。

フライヤーは、一九二〇年代から五〇年代に至るまで、ドイツの保守的教養層の間で広く読まれた思想家・社会学者であった。単著だけでも(死後編集されたものや共同執筆、編著を除いて)二八冊もの著作を刊行するという旺盛な執筆活動を行った。多くは、専門的な学術研究というより、華麗で難解な修辭を多用したエッセイ風の省察であった。そのため、戦後の実証的社会学者から批判されることも多いが、それだけに当時の一般知識人にとっては独特の魅力を持つていた。邦訳された著作は『現実科学としての社会学 (Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft)』と『社会学入門 (Einführung in die Soziologie)』の二冊のみだが、彼の名を最も有名にしたのは『右からの革命 (Revolution von Rechts)』であろう。出世作となった初期の時代批判的な著作に加え、戦後に刊行したヨーロッパ史や産業社会批判に

関する著作も広範な読者を得た。だが、戦後社会学界において、フライヤーという名には、古びた歴史哲学の遺物という評価と、ナチの片棒を担いだイデオログのイメージが付きまとう。戦後まもなく学界へ復帰した後も、その活動はしばしば戦前との断絶が指摘され、転向に対する謝罪も反省もないと批判された。

総じて、ナチ体制下に留まった社会学者は今なお軽蔑され、その業績に見るべきものはないとされる。一九八〇年頃からドイツ社会学では、自己省察現象とも呼ぶべき、ワイマール期やナチ期の社会学界研究が増加した。例えば、一九八一年の『ケルン社会学及び社会心理学雑誌 (Kölnher Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie)』の特集号『一九一八年から一九四五年におけるドイツ及びオーストリア社会学』は、その間のドイツ社会学の展開を三つに分類している。まず第一次大戦終結から一九三三年までのほぼ十五年間、続くナチ統治下の約十年間、そして一九三三年から一九五〇年代に至る亡命者の社会学である。この特集では亡命者の社会学が最重視されて研究が奨励される一方、「一九三三年以降のナチ統治下ドイツにおける社会学は、実際には体をなさず、結果において迷路に迷い込んだものだ」として、何の理論的成果も挙げ得なかったとする⁽³⁾。しかし、迷路をさまよう社会学の姿も、迷いや矛盾を含んだまま一つの相として研究されるべきではなからうか。

もちろん、フライヤーを「ワイマール歴史社会学」の推進者として再評価する試み⁽⁴⁾もある。だが、歴史分析に基盤をおき、時代診断を目的とした戦前のドイツ社会学は、非実証的であると批判されることが多い。西ドイツの戦後社会学がアメリカ社会学に寄り添うことで研究上の利点を得たのは確かだが、固有の哲学的伝統を否定することで学問の細分化を招き、結果的に自閉したとの反省は、おそらくドイツに限った問題ではあるまい。

フライヤーは、ナチ体制協力者だったのだろうか。ナチ政権下で高い地位に就いてからの彼は、ハイデガー同様、次第に不活発な活動しか示さなくなった。研究の断絶が指摘されるが、戦前から晩年までの一貫した主題は、社会国家の中で個人の自由がいかにして可能か、という問いであった。真摯な刷新願望と閉塞状況からの人間解放が、ワイマール

末期という混沌の時代に人気を得た所以であり、魅力だったろう。フライヤーのそうした「いかがわしさ」を引き受けて内在的に読む必要があるのではないか。政治的文脈からのみ評価してラベリングをおこなない、葬り去るだけでは不毛であろう。とりわけ彼の後期の著作にはリベラルな社会国家批判が見られるが、そうしたリベラルな思考とナチのイデオログと呼ばれた哲学的過激主義とが表裏一体であることも理解されるべきである。

二 現実科学への誘導

二一 思想的背景

二一 思想的背景
 ハンス・フライヤー⁽⁵⁾は、一八八七年、ライプツィヒ近郊でプロテスタントの教養市民層の家庭に生まれ、ドレスデンで伝統的な人文主義的教育を受けた。しかし、次第にキリスト教から離れ、宗教に代わる価値観を模索してギムナジウム時代から青年運動に傾倒するようになる。ルター派神学者の道を歩むべくグライフスヴァルト大学神学部に入學、後にライプツィヒ大学へ移るが、やがて神学を放棄して哲学や歴史や文学へと関心を移す。大学在学中には、資本主義・市民社会を批判して総合・全体性を求める青年団体、ゼラクライスに積極的に参加した。こうした既存の教養主義的な學問への不満と世界観への飢餓感から青年運動に傾倒する傾向は、当時、ドイツの学生の多くに共有されたものであった。フライヤーもまた、青年運動から多大な精神的影響を受けていた。⁽⁶⁾

一九一一年、彼は新ヘーゲル主義に基づく哲学史の博士論文を執筆、一九一三年にはベルリン大学に移りゲオルク・ジンメルに師事して強い影響を受ける。翌一九一四年に第一次大戦が勃発するや直ちに志願して従軍し、ほぼ四年間を西部戦線で過ごした。塹壕の中で書いた著作が終戦の年に発表され、彼は同世代の代弁者として一躍その名を馳せることとなる。このように、少年・青年期を過ごした第二帝政期の社会に対する疎外感から青年運動に関与し、やがて戦場の仲間意識に理想の共同体を見いだす傾向は、当時の典型的な知識人の知的履歴である。⁽⁷⁾

一九一九年、帰還したフライヤーは教授資格請求論文を執筆し、一九二二年にキール大学の哲学の私講師に就任、一九二五年にはライプツィヒ大学に設立された社会学講座の教授として招かれた。⁽⁸⁾この頃から彼の著作と評判は次第に政治的色彩をおびてゆく。例えば、一九二五年に発表された『国家 (Der Staat)』には、「技術」「民族」「指導者」「帝国」といった、その後のナチ党のスローガンと同じ用語が頻出しており、年長世代の反感と若い世代の共感とを集める。さらに、一九二九年に『現実科学としての社会学』、一九三二年には『社会学入門』と『右からの革命』、と代表作を相次いで発表した。これらの著作によって、彼はアカデミズムとイデオロギーの間、そして左右のイデオロギーの微妙な位置につく。この絶妙なバランスゆえ、一九三三年のナチ政権成立直後、彼はライプツィヒ大学の文化史・世界史研究所長とドイツ社会学会会長に就任することとなった。この社会学会会長への推挙は、フライヤー自身、親ナチ派と反ナチ派の争いによる学会の分裂を回避するための妥協案と受け止めていたという。⁽¹⁰⁾

二-2 現実科学としての社会学入門

フライヤーの社会学上の主著『現実科学としての社会学』と、これに基づく『社会学入門』はよく似た内容をもつ。これらは社会学という学問への入門書ながら、『右からの革命』で表される現実社会への危機意識を基礎づける社会学展観が考察されているので、ここでは併せて検討したい。

「社会学は、危機的時期として感ぜられた市民社会の科学的自覚として成立した。それゆえ社会学は最初から現在科学 (Gegenwartswissenschaft) として発生した⁽¹¹⁾」と、フライヤーは社会学を定義する。哲学者として出発した彼は、社会学や哲学とは異なり、社会学は危機の時代に対応できる学問だと考えていた。そうしたワイマール末期のドイツ社会学にあって、『現実科学としての社会学』は、その問題意識においても時代認識のうえでも、強いインパクトを持っているのである。

フライヤーは、ディルタイの分類に従って、科学を「ロゴス科学」と「エトス科学」に二分類する。ロゴス科学とは、対象を意味連関の体系として構築するにすぎないが、エトス科学は、有意義的な人間の現実を対象に持つ。そして、社会学は、歴史的に絶えず生成しつつある現実としての社会形象を対象とする限り、エトス科学であり現実科学であるとされる。ここで重要な意味を持つてくるのは、エトス科学としての社会学がこうした性格を付与されるとき、そこに現れてくる実践的な側面であろう。¹²⁾

二-3 階級社会の将来像

まず、フライヤーの現実認識としての社会構造概念を見ておこう。彼は、フェルディナント・テンニースによるゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二分類を發展させ、前者に支配の原理が入り込むことによつて後者への移行が成立するとした。ゲマインシャフトとは、集団内部に支配関係の存在しない歴史的時期とされる。ゲゼルシャフトはさらに、「身分社会 (Standgesellschaft)」と「階級社会 (Klassengesellschaft)」に区分される。彼の理論の独自性は、それらの構造自体を「段階 (Stufen)」であると同時に「成層 (Schichten)」としても捉える点である。つまり、時間的に経過してしまふ歴史的な發展段階であると同時に、そうした段階が層として重なり、永久的に社会の基礎構造をなしてゆくと考えるのである。

それゆえ、ゲゼルシャフトはその構造の基礎にゲマインシャフトを持ちうるが、その例が「フォルク」¹³⁾である。この近代的なフォルクは、言語ゲマインシャフトであり、政治的運命ゲマインシャフトであり、血縁ゲマインシャフトであるというように、多義的な性格を付与される。¹⁴⁾ここで彼が「本来の意味における層」としてフォルクを取り上げ、このゲマインシャフトの成層を社会構造の基礎においたことは、彼の歴史主義の破綻であり論理的な矛盾と見る考え方もあ¹⁵⁾る。だがむしろ重要なことは、この社会構造概念によつて、彼のイデオロギー的立場の保守的性格が強化され、理論と

実践的意図とが結びつくことである。「社会学の対象は歴史的意欲である。社会的現実はその志向される瞬間において、実践となる」[ES: 148 (一九八頁)]ならば、変革に向けた実践的意志と社会学理論との間の距離は、否応なく接近するのである。

フライヤーは、社会学の対象としての現代を、「過渡期および急迫した決断の時代として観察されるべきである」[ES: 140 (一九〇頁)]と考える。そうした社会が発展する方向と将来像を、彼はどのように描いたのか。

彼は、ゲマインシャフトからゲゼルシャフト(さらに身分社会から階級社会へ)という発展に続く第三段階、つまり階級社会を克服して次に出現すべき社会像として、三つの可能性を描いた。まず第一に、マルクスのな階級社会の解決である。プロレタリアートの革命によって政治は「無産階級の独裁」という形式を取り、搾取のない「国家」は無用の存在となって死滅し、新しい型の社会秩序「共同態(Gemeinwesen)」が現れるというものである。第二の解決策は、マルクス主義のような国際的規模ではなく、「フォルク」あるいは非階級的な社会発展を前提とし、市民社会という領域の内在的過程として見出されるとする。ここには、修正社会主義や保守的有機的なフォルク概念、成熟した産業社会の自由主義理論などといった多様な形式が含まれる。そして、第三の解決として、「精確な意味における国家社会主義的 (statsozialistische) 類型の解決」[SW: 291 (三四九頁)]が挙げられる。もちろんここでの国家社会主義とは、いわゆるナチズム、国民社会主義 (Nationalsozialismus) ではなく、哲学的にはヘーゲルやフィヒテやシェリングに結びつく多様な政治思想を含む。そこでは、階級対立によって崩壊しつつある市民社会に新しい構造をもたらす勢力として国家を捉え、国家をこの新しい構造自体の原理として考える。資本主義的階級社会の矛盾は、経済の外にあって社会を超えた国家の力を必要とするため、解放され純化された国家の政治活動によって解決されねばならないと考えられるのである。

注目すべきは、これら三つの解決方法に内在する共通内容は、それぞれ階級社会の否定のみならず、支配なき労働の

世界を志向するという点である。もちろん彼は、マルクス主義と、保守主義の特徴を持つ国家社会主義ないし有機体論的フォルク概念との間に明らかな政治的対立があり、それぞれが異なる社会構造を目指すと思込んでいる。その上で、三つの解決方法の共通点として彼が描くのは、以下のような、一見すれば社会主義的と見える社会像なのである。

新しい社会状態は、いずれにせよこのように、階級なる現象をもはやその主要な形成原理としては含まないだろう。それは正確な語義において、支配なきものとなるだろう。……合理的に形成された労働の世界が志向される。そこでは、小規模には同等の権利を持つ成員の分業的集団が存在し、その図式が大規模に繰り返される。そして、全てを処理し得る力がそれらに適合する仕事を指定し、しかも実質的に必要な権利以上を占有する者がいない。全ての働者は全体に奉仕し、全ての指導的地位はその支配性格を最小限にまで剝奪される。例えばこれが、具体的に成就された場合の理想主義的な「自由の国 (Reich der Freiheit)」であろう [SW: 294-5 (三五三頁)]。

こうした支配なき労働の世界を階級社会の将来に見るフライヤーの口調には、新たな社会秩序への期待が表れる。こうした理想自体は、マルクス主義にもナチズムにも適用できる性質を持つと言えよう。

だが、どの解決策が階級社会を超えて新たな秩序を形成するに相応しいか、フライヤーはここでは自分自身の考えを明確にせず、注意深く態度を保留する。そして、『社会学入門』の最後の問い、「いかなる新しい歴史力が現代の産業社会に成長するか。このような社会秩序を変革するには、いかなる意志が歴史的に妥当であるか」[ES: 149 (一九九頁)]に対する彼なりの解答として、『右からの革命』が位置づけられるのである。

三 新しい革命

三-1 変革への意志

一九三一年の夏に刊行され、フライヤーの名を世に知らしめた『右からの革命』は、学術的と言うよりは政治的な印

象を与える。前年の『現実科学としての社会学』では党派の関与と社会分析との密接な関係を強調したものの、イデオロギーと社会学との間にごく細い線を描いただけだった。だが、『右からの革命』によってフライヤーは、レトリカルな装いに隠れて、はっきりとアカデミックな大学人から政治的イデオログへの跳躍を果たしたとされる。⁽¹⁶⁾ 彼は、社会に対して国家を、経済に対して政治を対置し、それぞれ後者に最高の叡智と決断を求めた。そしてそこにフォルクを主体とする革命の使命と意義を見ようとしたのであった。

階級対立に覆われた産業社会の克服のために、「フォルク」によって国家が階級社会へ転化することを阻止し、真の国家を解放しようとする発想自体は、一九世紀ドイツの保守的な思想的伝統に則ったものであった。階級社会からのフォルクの生成を社会的に問題化した点ではロレンツ・フォン・シュタインの国家社会主義的な要請に沿うと同時に、ヘーゲルの国家観に深く根ざしていると見られている。⁽¹⁷⁾ また、青年運動や第一次大戦への従軍によって、ゲマインシャフト的環境での感情的充足と指導者への献身を体験し、内的本質から形成される新しいゲマインシャフトを政治的目標に設定するに至った。

さらに、当時の政治的・経済的混乱が背景を形成した。議会政治は不安定で、一九一九年のシャイデマン連合内閣から始まり一九三〇年の第二次ミュラー大連合内閣へと至る十一年間に、十五もの内閣が生まれながら、最長で十五ヶ月しか存続しなかった。一党たりとも単独過半数をもって組閣できた政党は存在せず、各党派は離合集散を繰り返した。政治の混迷は、思想的な混迷を反映していた。複数の世界観が乱立・抗争を繰り返して、どれ一つとして決定的優位を保ち得なかった。経済成長は停滞し、高い失業率にもかかわらず、国内財政の逼迫による福祉政策の切り詰めで、国民の間に不安と不満が充満していた。そんな一九二九年十二月、テューリンゲン地方選挙でナチ党が大躍進を見せる。翌一九三〇年六月、フライヤーのいたザクセン州議会選挙で、ナチ党は全体の十四・四%の得票を得て第二党となった。さらに一九三〇年九月、ドイツ連邦選挙でナチ党は歴史的な躍進を実現する。一九二八年の八十万票十二議席から、六

四〇万票一〇七議席、全体の十八・三%の票を得て、ドイツの第二党に躍り出たのである。⁽¹⁸⁾『右からの革命』は、こうした現象を背景に書かれた書物であった。

フライヤーはしばしば、ドイツ・ロマン主義の伝統に連なると位置づけられるが、実際にはアンビヴァレントな態度を取っていたらしい。「全体性」としての民族や国家という規範的な描写には共感しつつも、現代的な「市民」や「産業社会」を分析したり、外界に働きかけて変革したりするには、内向的すぎて不十分な思想だと批判的であった。彼の思想を貫く主題は、自分たちが生きる時代を社会的な断片化と文化的な崩壊の時代と捉え、個人の有意味な生活に対する脅威を解決することであった。それゆえ、ナチ党の大躍進を目の当たりにした彼は、当時のドイツが政治的転換点にあると直感して、従来のロマン主義的世界観の無力さを脱する機会に敏感な反応を示した。⁽¹⁹⁾

三―二 革命の主体

『右からの革命』の冒頭は、まさに革命宣言といった趣である。

新たな前線がブルジョワ社会という戦場に形成されつつある——右からの革命だ。未だ表現されざる未来への合い言葉に内在する磁力と共に、右からの革命は、あらゆる陣営から、最も堅固な、最も発達した、最も現代的な人間を戦列に引き寄せる。未だ結集してはしない、しかし時は到来した。その運動は未だ意識もシンボルも案内も持たぬ精神の行軍にすぎぬ。しかし一夜にして前線が生じたのだ。革命は、古くさい政党に、行き詰まった綱領に、時代遅れのイデオロギーに波及しよう。革命は、そここでブチブル的になり下がった世界の頑なな階級対立に闘いを挑み、成功しよう。革命は未だ固着した十九世紀の名残を排除し、二十世紀の歴史に自由を得さしむるのだ。⁽²⁰⁾

この本の目的は、新しい政治現象がもつ歴史的意義の解明とされる。だが、挑発的ながらも難解なレトリックに満ちた文体からは、知識人層を読者対象とし、彼らに政治的変化の重要性を説くための著作と読まれた。「ただ問われてい

るの、いくつかの完璧な事実を確認し、いくつかの生成しつつある発展を意識化し、その中で成長した決断を適切なもの前に下すことである」[RR: 6]という呼びかけは、当時まだナチ党の運動に懐疑的だった知識人に決断を促すものと解釈された。

「革命と革命家」の定義の緩やかさが、この本の魅力でもあった。曰く、かつてのあらゆる革命は、アベ・シエイエス以来すべて左からの革命であった。だが、これは十九世紀的な革命の概念で、今や古びてしまっている。新たな革命の哲学と哲学の革命が必要である。左の革命は本物ではない。「革命とは、社会の歴史に新たな原則を生み出すことだ。革命家とは、未だ歴史的現実にならぬこの新たな原則そのものである人間だ」[RR: 18]。つまり、意志さえ持っていれば、あらゆる者が革命主体に含まれるのであった。

三-3 十九世紀の自己破産

こうした「革命家」が変革すべきは「産業社会」である。この用語は、他の箇所で見られる「ブルジョワ社会」や「社会」と同義であり、ヘーゲルやテンニースの言葉遣いを継承する。フライヤーの産業社会観は、それ以前の著作から一貫していた。それは人間を疎外し、根無し草にする社会なのである。

過去のあらゆる時代には、人はどこかに根付いていると感じ、その結果として根づいていた。……しかしながら、産業社会は、それを構成する物質と暴力の打算以外の何もものにも基づかない。人は生まれながらの大地に根付かず、不安定に漂う。そこからは社会固有の合理性以外の何の活力も生じない。[RR: 20-1]

産業社会の社会的集合体は、「階級」という集合的利益を追求するため組織された集団から成ると考えられている。これは、テンニースが『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で描いて見せたゲゼルシャフトの特徴を継承している。産業社会とは、人間を単なる労働者と消費者の役割へと降格させるシステムである。そうした社会に対して、国家は中

立的立場に立たされ、組織化された社会的利害関係の間の仲介者に墮落した、と彼は批判する。

こうした国家は、拘束力を持つ全体意識でも恒常的意志でもない。それは、社会的な諸勢力の競争を調整するため
の装置にすぎない。……それは、非政治的なものすべての総体である [RR: 60]。

産業社会において国家が指導的役割を喪失したことが、『右からの革命』の議論の大半を占める。こうした社会と中立化された国家とは、共産主義という亡霊を追放するため、恒常的な秩序形成に向けた社会政策を発展させる。この政策を労働者が受け入れれば、彼らの闘争の目的は全か無かの革命ではなく、単なる社会的進歩の達成となる。この時、十九世紀の革命的弁証法は清算され、客観的に秩序づけられた労働世界という理念は現実のものとなる。制度という手段を通じた産業社会が完成される。ここではマルクス主義者はすでに敗北し、左からの革命への現実的な希望は消失する、とフライヤーは指摘する。社会主義はもはや産業社会内部での権利と利益の拡大を求めるだけの非革命的な運動に墮落し、資本主義の中心的要素は無傷のままである。共産主義も、十九世紀の古い革命的意図を組織化し続けているにすぎず、プロレタリアートが産業社会の内部で福祉を享受する決断を阻んでいる。これが彼が「十九世紀の自己破産」と呼ぶ事態である。

こうして、左からの革命は歴史上、清算されてしまった、とフライヤーは宣告する。

その担い手は産業社会のなかに組み込まれてしまった。革命に残された問題は、社会的進歩にとって残された問題へとすり替えられてしまった。革命の動因は、現代的国家の形成や社会政策や議会政治やいわゆる民主主義といったものに都合よく使われてしまったのだ [RR: 39]。

現代の産業社会においては、すでに左からの革命はあり得なくなってしまう。こうした状況での新たな革命の可能性こそが、十九世紀的な、つまり近代的な限界を超える革命の可能性、「右からの革命」なのである。この革命主体となる「フォルク」を、彼は注意深く議論する。

社会が完全に社会となり、あらゆる勢力が利害として、あらゆる利害が調停可能なものとして、またあらゆる階級が社会的必要として、認知され承認された後には、そこに社会でも階級でも利害でもなく、調停も不可能な、つまりは全く革命的なもの、すなわちフォルクが現れる [RR: 37]。

このフォルクが、産業社会に対抗する新しい意志と権利をもつ真の革命主体とされる。自らを社会的利害関係から定義せず、産業社会の既存のシステムに吸収されない新たな主体である彼らによって産業社会が克服される時、それは右からの革命と名付けられる。つまり、「フォルク」とは何らかの集団や属性によって定義されるものではなく、あくまで変革と参加の意志によって規定されるのである。

三-4 革命の使命

こうした革命の使命は「国家の解放、人間の解放」である。左派や旧右派の革命と異なり、右からの革命は、国家を社会的利益のために捉えるのではない。社会的な利益追求の場へと墮落した国家を解放する革命なのである。

人間が二十世紀の人間であるがゆえ、十九世紀は過ぎ去った。人間が、もはや社会的利益から自己を定義しない人間であるがゆえに、産業社会の原理は無効なものとなったのだ [RR: 71]。

しかし、フライヤーは、この革命を理論的に分析を試みは誤りだと忌避する。そうした革命には分析ではなく、その本質と歴史的意義の評価こそが必要だとして、革命を可能にする社会過程の描写に力点を置く。

産業社会は人間を単なる生産者と消費者としてのみ扱うがゆえ、より大きな全体への帰属感を個人に与えることに失敗した。フライヤーにとって人間の自由とは、帰属感と参加の意志によって保証される。

人間の自由は、農工業者の救済によって、自然権と啓蒙によって、市民革命と憲法によって、生じるのではない。逆に、これら全ての事柄が産業社会を発生させた。つまり、人間解放の意志が不可欠になるような状況を、これら

が創り出したのだ。／自らのフォルク、それも固有の領域を持つフォルクにあるとき、人間は自由である。自らの責任で自らの歴史を導くという具体的な共通意志のもとにあるとき、人間は自由である [RR: 68-9]。

彼にとって「真の人間解放は、人間が産業社会の利害政治から『解放された』国家に住むとき実現する」 [RR: 61] のである。こうした革命を創造しうる新たな秩序の革新に希望を寄せるが、この革新もまた人間の主体性と意志の問題として捉えられる。

政治的事件と政治的成果とは「……」人間の存在と行為の産物であり、変化とはその事件が生ぜしむる人間主体の変化である。人間の意志の中に歴史が生起する [RR: 71]。

だが、こうした言葉遣いはやはり、当時の読者に対して特定の政治状況を想起させざるを得ない。さらに著書の最後では、破壊的あるいはユートピア的な旧来の革命に対置された現代的革命に向かいつつ、現状の変化を受け入れるよう呼びかけられているのである。

急進的になるために、ニヒリストになる必要はない。現代的であることは、もはや妥協ではない。そして、未来的であることは、もはやユートピアではない。そうではなく、これらは本物の何かを生み出すあらゆる時代と同様、一つに合流するのだ。これらの事実は全て新しい。しかし事実なのだ [RR: 72]。

教養市民層を対象に書かれた『右からの革命』は、結果的に、「国民社会主義の協力者からも敵対者からも、ナチ運動の歴史的意義と倫理的 중요性とを理論的に擁護しようとするものと理解された²¹⁾」という。しかし、明らかに国民社会主義のことを指すにもかかわらず、「国民社会主義」や「ナチ」「ヒトラー」という固有名詞は一度も表れない。用心深く態度を保留したとも言われるが、『右からの革命』の高い抽象性からして、フライヤーにとっては、現実の運動より理念としての運動や革命が重要だったと言えよう。実際、ナチ政権成立直後の暫定的入党制限日の前後に駆け込み入党した当時の多くの学者とは異なり、彼は遂に入党することはなかった。ナチ政権下で高い地位に就いたとはいえ、彼は

現実政治とは一定の距離を保とうと努め、直接的な関与を望まなかったと言われる⁽²²⁾。結局、個人が帰属感と充足を得られる領域の理念こそを重視し、国民社会主義運動のダイナミズムにその体现を見たからこそ、変革への希望を込めて『右からの革命』を著したのだろう。

四 社会的全体と個人の自由

四―1 体制協力者が転向者か？

一九六九年、フライヤーが逝去したとき、『ケルン社会学・社会心理学雑誌 (Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie)』に、ルネ・ケーニヒによる追悼文が掲載された⁽²³⁾。ここには、フライヤーの業績に対する形式的な賞賛すらなく、ただひたすらに彼の政治的態度が辛辣に批判される。国民社会主義や戦争に対しても、新生ドイツに対しても、終始曖昧な態度をとり続けた狡猾な人間として、ケーニヒはフライヤーを位置づけた。

彼は確かに国民社会主義を準備した当事者だが、「……」しかし非常に頭が良かったために、国民社会主義がドイツをどこへ導かざるを得ないか見抜いたのだ。まさしくここに、彼の立場の深い曖昧さが生じる⁽²⁴⁾。

戦後フライヤーが再び学界に迎えられた経過についても、彼が「謙虚な」姿勢で現れたための措置だったが、「しかし、その謙虚な現れ方は、完全な改宗には程遠いものだった」と断じる。また、最近では体制への幻滅と解釈されることの多いナチ下での著作についても、単なるニヒリスト的要素の現れと見る。「おそらくは反動的な彼の崇拜者達を驚かせぬために、フライヤーはそれまでニヒリスト的要素を慎重に隠していた。しかし遅くとも一九三六年からは、この要素はいくつもの論文にきわめて明白に現れた」として、『哲学問題としての政治的なもの』(一九三六)や『パラス・アテネ——政治的民族の倫理』(一九三五)といった著作を例に挙げる。そして、「奇妙なことに、今日までドイツにおける学術的な論争は、このニヒリスト的で根無し草的な立場表明について無関心だった⁽²⁵⁾」と批判する。さらに、国民社

会主義についてもドイツ連邦共和国についても一切口を閉ざしたフライヤーは終生ニヒリストであり続けたとして、彼の社会学全般を「エトスなきエトス社会学」と揶揄した。

フライヤーの死後、こうしたケーニッヒの見解を受け継ぐ形での否定的なフライヤー評価が増加した。ワイマール共和国にアンチテーゼを主張することで国民社会主義の理念と結びつき、ドイツ社会学を謀殺した社会学史の負の部分、「清算されざる過去」として彼を捉える見方²⁶である。今なお、社会学におけるフライヤーは、語り手の思想信条の潔白を証明するための踏み絵のごとき役割すら果たしている。

ナチ時代、フライヤーが果たした役割には諸説ある。²⁷特に、一九三四年一月、ナチ科学教育局による「社会学者大会 (Das Treffen Deutscher Soziologen)」が開催され、社会学の国家動員がもくろまれ、ドイツ社会学会は活動の場を失って実質的な活動中止に追い込まれた。このとき「指導者 (Führer)」という名称で会長職に就いていたフライヤーは、何の力も行使できなかったといわれる。²⁸

こうしたこともあってか、ナチ政権成立後まもなく彼の政治的情熱は幻滅に転じ、論文や講演での政治的色彩も薄れ、協力不十分と非難されるようになった。ナチの学生や雑誌などに政治的態度を批判され、秘密警察などの監視がつき、同僚が次々と免職されるに及んで、一九三八年、彼はみずから希望してブダペスト大学ドイツ文化史講座の客員教授としてハンガリーへ赴く。その間、一九四一年からはブダペストのドイツ科学研究所所長も兼任した。これらは、同盟国ハンガリーとの文化交流促進のためにドイツ外務省が設立したポストである。こうしてフライヤーはドイツの対外政策の一端を担ったことになるが、彼自身は任期延長を繰り返し、終戦後までドイツへ帰ることはなかった。

終戦後、ソ連の占領下に入ったハンガリーでナチ以上に徹底した全体主義を経験したフライヤーは、政治の優位による共同体の回復という理想を断念せざるを得なかった。一九四八年、彼は戦前の著作と対ナチ協力を理由にブダペスト大学を免職になってライプツィヒへ戻り、その後西側に移る。再び活発な著作・言論活動を行い、一九五三年にはミュ

ンスター大学の客員教授の地位を得た。保守主義と西ドイツ的自由主義・民主主義を和解させた声明や著作を発表して、外見上はほぼ復活を果たすが、特に若い世代からの不信のなか、一九六九年に逝去した。

四・二 『産業時代のもとの社会的全体と個人の自由』

国民社会主義のドイツと社会主義のソ連という二つの全体主義を経験した後、ドイツ社会学界に復帰したフライヤーの理論は、表面上は明らかかな変化を見せた。一九五七年に発表された『産業時代のもとの社会的全体と個人の自由 (Das soziale Ganze und die Freiheit des Einzelnen unter den Bedingungen des industriellen Zeitalters)』⁽²⁹⁾は、小著ながら晩年の彼の思想をよく表している。

産業社会への批判は戦後も継承されたが、かつてのように革命を通じて克服する対象ではなく単なる時代解釈となり、政治的主張は影を潜めた。「国家」対「社会」という図式は保持されたが、かつて描いたような対立構造として中心に据えられるのではなく、「個人の自由」を可能にする背景として描かれる。彼の「自由」観とともに、産業社会の進歩に関する捉え方も変化した。

フライヤーは、公共の安寧、公共の福祉、生活水準の向上、最大多数の最大幸福などは全て、進歩の意味として決定的な答ではないとする。進歩とは自由であり、「産業システムの進歩は自由の進歩である」。具体的には、工業生産というものが技術的な力という点で人間の自由の程度を増大させる、つまり、物理的な制約からの解放をもたらすのである。彼が産業社会のテーゼとして、「人間の自由がその社会の進歩によって徐々に獲得された成果であるばかりでなく、人間の自由が産業社会という秩序の構成要素であったとしても、それは、〔……〕産業社会の原理である」[SG: 100 (五九頁)]と述べるとき、産業社会に対するかつての全面的な否定が薄らいでいることが判る。

工業の進歩は自由を増大させたが、同時に自由を脅かしつつもある。論証のため彼はまずブルクハルトやミルなどの

理論を用いて自由の概念を検討した後、トクヴィルの言う「詭弁的な」自由の概念、「無抵抗にされた個人が絶大な力を持つ国家と同一視され、それゆえ表向きは国家に関与するうち、ますますもって実際に国家の手中に陥ってしまうこと」[SG: 103 (六二頁)]を危険視する。こうした国家という大きな全体への帰属を通じた個人の自由という概念は、かつて彼自身が真の自由として賞揚していたものである。にもかかわらず今や彼は、無抵抗な個人が国家に隷属する危険性は焦眉の問題であり、産業社会の進歩という現象によってその危険性は高まると警告を発する。

産業社会の秩序は、自由な個人で構成されると信じられ、事実上そのように振る舞われているが、その進歩の途上では、不自由という危険性をもっている。そして、もし自由が人間に固有のものであるならば、自由は疎外を内包する、と言わざるを得ない。〔……〕「疎外」という概念が意識されずとも、人は知っている。自由というものは、

疎外に対して戦う場合のみシステムの中にある、つまり疎外の内部で、あるいはその克服において存在するのだ、
 ~ [GF: 103 (六一頁)]。

ここでは自由は疎外と表裏一体だと認識されている。彼を用いる疎外という概念は、ほぼマルクスのものと等しい。つまり疎外の本質とは、労働の外でやっと自分の許にいと感じ、労働のなかでは自分の外にいと感ずるといふ点にある。このことは現代もなお古びることない深刻な問題だと彼は評価する。

こうした現象をもたらす、成熟した現代産業社会のシステムは、さしあたり国家と社会の分離の消滅によって特徴づけられるとする点は、以前とほぼ同じである。このシステムは、国家と社会が癒着する方向に進み続け、今や国家は社会生活のあらゆる領域に浸透しているとされる。他方で、社会的諸力の側でも、巨大な団体に組織化されることで、その行為を国家に管理され統制される。強力な管理経済は産業社会の必然的帰結だが、このとき社会国家は大規模な分配者・扶養者となって被扶養者を手中に治めるのである。この国家的行為の肥大化こそが全体主義へ導く危険性であると彼は警告する。こうした危険性へのカムフラージュとして、現在の社会システムは、個人の自由の代用形式を發展させ

たが、それが「規格化した消費」という「選択の自由」である。この代用形式に人間が満足させられてしまう危険性が甚だしく大きい、という彼の危機感後の消費社会論を先取りするかのようである。

こうした状況で、いかにすれば個々人の自由が可能なのか。この問いに対する彼の自由論は興味深い。「いかなる社会秩序も、個人的存在の自律性を可能にすること以外、もはや何も行うことができない」ため、「災害補償、完全雇用、あるいは生活水準の保証のように、自由を制度的に保証することはおそらくパラドックスであろう」[SG: 113 (七〇頁)]と結論するのである。そして、補償や免除や給付といった福祉を拒否する自由を掲げる。

これらの事柄を個々人は自分自身で行うことができるし、こうしたシステムが完全になればなるほど、個人はますますエネルギーに自分で行うに違いないだろう。こうしたことは場合によって、幾分かの勇気を前提とする。

ゆえに、その限りで次のように言うべきであろう。すなわち、自由でない人間はその人自身に責任があるのだ、と [SG: 114 (七〇頁)]。

かつてフライヤーは、「国家からの自由」を自由主義的で否定すべき自由概念として嘲り、真の自由とは積極的な自由、「国家による自由」だと主張した⁽³⁰⁾。それと対比してみると、ここでの自由概念はむしろ多元主義的な自由の概念である。晩年の彼が恐れていたのは、西欧型の社会国家がソヴィエト型の社会国家へと変質していくことであった。『産業時代のもとでの社会的全体と個人の自由』は、そうした流れに対する防衛措置として個々人の抵抗が最も有効だと考えた呼びかけであった。個人がシステムから離脱する可能性が残されている点が、全体主義に陥らない社会国家の存立条件となるのである。自由を個々人の選択に委ねる結論には、いわゆる民主主義的な理念に対する全面的な肯定すら読み取れるのである。

五 結 語

曖昧な転向者と見えるフライヤーの理論は、社会国家における「個人の自由」を可能にする条件の模索という主題において一貫していた。ワイマール末期の著作では、勃興しつつある強力な社会国家に帰属してこそ個人の自由が可能になるという主張を繰り返し、晩年には、ソビエト型の社会国家による保護を拒否することが自由の第一歩であると喝破した。ただし、ワイマール期の著作では、遂に一度として国民社会主義という固有名詞を出すことなく、同時代の読者には判るような書き方ではめかすことによって。

ワイマール末期のフライヤーが煽つてみせた混沌からの刷新願望は、魅力的なものだった。産業社会的なシステムの機能不全に対する危機意識を表現した「十九世紀の破産」という言葉は、二十世紀を通じて繰り返し社会学の主題となってきた。最近の例では、奇しくもチェルノブイリ原発事故の一九八六年に刊行されたウルリヒ・ベックの『危険社会』が同様のスローガンを掲げている。現代を以前の時代とは異なる種類の脅威に曝される「危険の時代」と捉えたこの書物は世界的なベストセラーとなり、日本の社会学界にも大きな影響を与えた。公害や放射能といった環境面での危険のみならず、あらゆる領域で古い価値観の行き詰まりが生じていることが指摘される。そして、現在曝されている危険は、十九世紀的「産業社会」に基づくシステムに起因するとされる。⁽³¹⁾ 今なお説得力を持つ「十九世紀」の清算という主題を、フライヤーは先取りしていたと言える。

また、フライヤーの用いる「フォルク」や「民族」といったカテゴリーも、混乱の渦中にある人々にとつては魅力的に響いた。参加と変革の意志さえ持てば、公共圏を形成するための知識やプロセスは必要とされない。参加の感覚が与えられる、ある種の「民主主義」が可能になるのである。もっとも、フライヤーはやがて、そうした無条件に参加が保証される自由から、選択と自己責任によって獲得する自由へと、自由の条件を転換させたが。

フライヤーが「いかがわしい」社会学者と呼ばれた所以は、ほのめかす対象がナチとヒトラーだったことであろう。学問は、価値判断から自由な立場に立たねばならないと言われる。だが、価値自由を標榜する社会学理論においてすら、多かれ少なかれ、優れた研究の多くでこうしたほのめかしは行われる。そもそも、社会学という学問は、ドイツであれ日本であれ、社会国家の要請によって成立したのではなかったか。哲学や経済学、歴史学といった既存の学問では対応できない社会の現実に対処するため、「社会政策学」が生じ、「社会学」に発展した。それゆえ、時代、政治状況への価値判断を、おそらくは哲学以上に強く反映させざるを得ない。こうした「現実」との距離が、社会学という学問の魅力でもある。ハンス・フライヤーの社会学がまとう「いかがわしさ」は、社会学自体の存在に関わる「いかがわしさ」を、ある極端な形において体現しているのである。

注

* フライヤーの著作から引用した際、原文を参照の上、邦訳書の訳語や表現を適宜変更した。

(1) ワイマール期の保守革命思想に関する最良の見取り図としては、Herf, Jeffrey, *Reactionary Modernism. Technology, Culture, and Politics in Weimar and the Third Reich*, Cambridge University Press, 1984. (中村幹雄・谷口健治・姫岡と「子共訳『保守革命とモダニズム』ワイマール・第三帝国のテクノロジィ・文化・政治』岩波書店、一九九一年)。

(2) ビエール・ブルデューは、ハイデガーを「いかがわしい」哲学者と呼ぶ。「いかがわしい [ouche]」という文法用語は、M・ボーズの『体系的百科事典—文法と文学』第二巻によれば、「初め或るひとつの意味を示すように見えながら最終的にはそれとは全く別の意味を規定するような言葉遣いである。つまり、一見するとある関係にあるように思えるが実は別の関係にあるというような場合、二重の意味やほのめかしを行っている場合のことである。Bourdieu, Pierre, *L'ontologie politique de Martin Heidegger*, Editions de Minuit, 1988. (桑田禮彰訳『ハイデガーの政治的存在論』藤原書店、二〇〇〇年)。

(3) Lepsius, M. Rainer, "Die Soziologie der Zwischenkriegszeit. Entwicklungsstendenzen und Beurteilungskriterien", Lepsius, M. Rainer (Hrsg.), *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945*, 1981, S. 9.

- (4) Kruse, Volker, *Historisch-soziologische Zeitdiagnosen in Westdeutschland nach 1945*. Eduard Heilmann, Alfred von Martin, Hans Freyer, Suhrkamp, 1994. p. 80 以下、ナチ期に於けるフレイヤーの研究活動を論及されている。
- (5) Muller, Jerry Z., *The Other God that Failed. Hans Freyer and the Deracialization of German Conservatism*, Princeton University Press, 1987. 44' フレイヤーに関する初稿の本格的な論文である。以下、フレイヤーの経歴は基本的に本書に則した。
- (6) フレイヤーの思想とヴェーゲン青年運動の関わりについて、Üner, Eilfriede, "Jugendbewegung und Soziologie. Wissenschaftssoziologische Skizzen zu Hans Freyers Werk und Wissenschaftsgemeinschaft bis 1933" in: Lepsius (Hrsg.), op. cit.
- (7) 青年運動を経験したフレイヤー青年たちは、藍染の仲間意識を青年運動特有の情熱的な言葉遣いで盛んに記録した。彼らの表現によって第一次大戦の志願兵に対する英雄のイメージが形成され、ワイマール期の青年たちは強く訴えかける力を獲得した。Mosse, George L., *Fallen Soldiers: Reshaping the Memory of the World Wars*, Oxford university Press, 1990. (拙訳「英雄—世界戦争をめぐる記憶の再生—」柏書房、二〇〇一年刊行予定)。
- (8) フライムヒル大学での「ヴァーナルト・マンナーカール・マンツェロを始めたとする学問的伝統との関連を指摘されている。Üner, Eilfriede, *Soziologie, als 'geistige Bewegung'*. Hans Freyers System der Soziologie und die 'Leipziger Schule', Acta Humaniora, VCH Verlagsgesellschaft, 1992.
- (9) フレイヤー研究所でフレイヤーの活動について、Hoyer, Siegfried, "Hans Freyer als Direktor des Institutes für Kultur- und Universalgeschichte (1933-1938)", *Geschichte und Gegenwart*, vol. 9, 1990.
- (10) Kaiser, Dirk, *Sociological Adventures. Early Edward Eubank's Visits with European Sociologists*, Transaction Publishers, 1991, pp. 93-94.
- (11) Freyer, Hans, *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft. Logische Grundlegung des Systems der Soziologie*, B. G. Teubner, 1930, s. 169. (拙訳直訳『現実科学としての社会学』日光書院、一九四四年、二〇五頁)。以下、引用は「[SW]」として本文中に記載する。
- (12) 秋元元郎『ドイツ社会学思想の形成と展開—市民社会論研究—』早稲田大学出版部、一九七六年、一三四頁。
- (13) 「フォルク」という概念は、ナチの「民族共同体 (Volksgemeinschaft)」イメージに比べて、あわめて政治的で人種的色彩を帯びた概念と解釈される。例えば、Sonthheimer, Kurt, *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die Politischen*

- Ideen des Deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933*, Nymphenburger Verlagsanstaltung, 1968. (河島幸夫・脇圭平訳「ワイマール共和国の政治思想」ミネルヴァ書房、一九七六年)。だが、本来「フォルク」は伝統的な意味では政治概念ではなく多義的なものだった。本来、非政治的であった「フォルク」概念が、世俗宗教的意味を帯びて青年・学生運動を中心としたドイツ知識人の世界を政治的に決定していく論理の旋回については、田村栄子『若き教養市民層とナチズム』名古屋大学出版会、一九九六年。
- (14) Freyer, Hans, *Einführung in die Soziologie*, Verlag von Quelle & Meyer, 1931, S. 133-4. (阿閉吉男訳『社会学入門』角川文庫、一九五五年、一七八頁)。以下、引用注は「[BS]」として本文中に記載する。
- (15) 例えば、新明正道『国民革命の社会学』甲文堂、一九三五年、一七〇頁、一九〇頁、福武直『社会学の現代的課題』日本評論社、一九四八年、一〇二頁。
- (16) Muller, op. cit., p. 186.
- (17) Linde, Hans, "Soziologie in Leipzig 1925-1945", in: Lepsius (Hrsg.), op. cit. S. 122-3.
- (18) Kolb, Eberhard, *Die Weimarer Republik*, Oldenbourg Verlag, 1986. (柴田敬二訳『ワイマール共和国史—研究の現状—』刀水書房、一九八七年、一八五頁、一八九頁—九二頁)。
- (19) Muller, op. cit., p. 191.
- (20) Freyer Hans, *Revolution von Rechts*, Eugen Diederichs Verlag, 1931, S. 5. 以下、引用注は「[RR]」として本文中に記載する。
- (21) Muller, op. cit., p. 189.
- (22) Käsler, op. cit., p. 94.
- (23) 戦後西ドイツにおけるコミュニケーター評価の中で最も否定的な例として、しばしばケーニヒヒのこの追悼文が挙げられる。例えば、Gielke, Roland, "Hans Freyer. Vom präfaschistischen Soziologen zum Theoretiker der "Industriegesellschaft", in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 29, 1981, S. 597-603. ただし、ケーニヒヒは肯定的評価の方が多数を占めている。
- (24) König, René, "Nekrologe: Hans Freyer, 31. 7. 1887-18. 1. 1969", in: *Kölnener Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 21. Jahrg. 2. Heft, 1969, S. 438.

- (25) *Ibid.*, S. 439.
- (26) 最近の日本におけるドイツ社会学説史では、例えば、秋元律郎『市民社会と社会学的思想の系譜』御茶の水書房、一九九七年。
- (27) ナチ初期における社会学界研究は数多い。例えば、Klingemann, Carsten, "Heimatsociologie oder Ordnungsinstrument? Fachgeschichtliche Aspekte der Soziologie in Deutschland zwischen 1933 und 1945", in: Lepsius (Hrsg.), *op. cit.*; Rammstedt, Ortheim, *Deutsche Soziologie 1933-1945. Die Normalität einer Anpassung*, Suhrkamp Verlag, 1986; Klingemann, Carsten, *Soziologie im Dritten Reich*, Nomos Verlagsgesellschaft, 1996. 鈴木幸壽「ナチス治下のドイツ社会学—シムルスキー、ケーニヒヒ、ダーレンドルフ、ラムシュテット、レンプシュスらの諸説をめぐって—」、『明星大学社会学研究紀要』八号、一九八八年、米沢和彦『ドイツ社会学史研究—ドイツ社会学会の設立とヴァイマル期における歴史的展開—』厚生閣、一九九一年。
- (28) 米沢、前掲書、二一七頁。
- (29) Freyer, Hans, "Das soziale Ganze und die Freiheit des Einzelnen unter den Bedingungen des industriellen Zeitalters", in: *Historische Zeitschrift*, Band 183, Heft 1, 1957. (鈴木幸壽・山本鎮雄共訳「産業時代のもとの社会的全体と個人の自由」、『明星大学社会学研究紀要』九号、一九八九年)。以下、引用注は「GF」として本文中に記載する。
- (30) Freyer, Hans, *Der Staat*, Fritz Recheiden, 1925, S. 165-7.
- (31) Bech, Ulrich, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp, 1986. (東藤・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局、一九九八年)。

(筆者 みやたけ・みちこ 京都大学大学院文学研究科博士課程／社会学)

advocates of the *Kenmitsu-taisei* emphasized their central doctrine, *Kubon-raigo*.

This conclusion also helps explain the difference in appearance between *Kubon-raigo-zu* in Japan and those in China. In China, with a few exceptions, such intimate ties between Buddhist schools and the authority of the emperor did not exist. This fact can be substantiated by the idea of *Souni-Fuhaikun* (sengni bu bai jun : 僧尼不拜君), which proposes that no laws for the laity be applied to monks and nuns, as they had already abandoned worldly life. Granted this was the case, there was no need for them to bow to the emperor. It was thus natural that *Kubon-raigo-zu* had not attained great popularity in China.

The Ideals and Difficulties of “Wirklichkeitswissenschaft”

About the Sociological Theory of Hans Freyer

by

Michiko MIYATAKE

Graduate Student of Sociology

Graduate School of Letters

Kyoto University

In this paper, I examine the works of Hans Freyer, a sociologist who was famous for his “sympathetic” attitude towards the Nazi Regime. His works were rather “louche” (equivocal), in the sense Pierre Bourdieu used when he called Heidegger a “louche” philosopher.

Freyer was very popular during the Weimar Republic period, especially among the younger generation. He was a typical intelligentsia of his time. Born in 1887, he was deeply influenced by the German Youth Movement, and so he volunteered in 1914 to fight on the western front for 4 years. Attaching some importance to real human life, he criticized traditional sociology as abstract and impractical. He advocated the “Wirklichkeitswissenschaft” (real science), the study of the contemporary social crisis in his sociological main works, *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft* and *Einleitung in die Soziologie*. In the last part of *Einleitung*, he questioned what kind of will could change the existing social order. To answer this question, he is said to have written the famous *Revolution von Rechts* in 1931.

In *Revolution*, Freyer proclaimed that a new kind of revolution was just about to begin, and that it would solve the old fashioned class-conflict problem which

prevailed in the bourgeois-minded 19th century. Because the revolution of the left or of the proletariat proved to fail, generating some functional disorders, the possibility of true revolution could only be realized by the "right". He used the concept of "right" not so much in the sense of "political right", but referring to everybody who had a strong will to change the society. He called such a subject of revolution "Volk", which he defined not as any group or attribute, but simply as the will to participate to this movement. One of the most attractive parts of this work might have resided in this liberal ideal.

Although *Revolution* does not contain any words such as "Nationalsozialismus" or "Hitler", Freyer was always considered to be a Nazi ideologue. After Hitler's seizure of power his enthusiasm soon cooled down, and he wrote very few political articles after that. However, following the Second World War, when he again became a member of the German Sociological Society, he continued to be criticized for his former political attitude.

Of course, I think that it is necessary for social sciences to take a "Wertfreiheit" (to free oneself from any judgement of value). However, one must bear in mind that sociology sometimes remains equivocal in its nature, as in the early stages of its development when it began to invent scientific methods to study social reality.